J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol.19, No. 2(2015) 157～175

佐賀県の児童・生徒・学生の学校生活における ことばづかいに対する意識調査

石丸喜久子[1]，野口　知孝[2]，武本　優貴[3]，
江頭三保子[4]，大浦　祐輔[5]，佐藤志帆子[6]

Attitude Survey on Language Usage in regards to School Life in Saga: From Elementary to University Level

Kikuko ISHIMARU, Tomomichi NOGUCHI, Yuki TAKEMOTO,
Mihoko EGASHIRA, Yusuke OURA, Shihoko SATO

要　　旨

佐賀県内の小学校・中学校・高等学校・大学を対象としておこなったアンケート調査（2012年６月から2014年６月にかけて実施）に基づき，学校生活におけることばづかいに対する意識について考察した。その結果，学校生活におけることばづかいに対する意識は，校種によって異なることが明らかになった。小学校では“先生”が学校生活でのことばづかいに対する意識のうえで大きな影響を与えている。一方，中学校と高校では先生だけでなく“上級生や先輩”が，学校生活でのことばづかいに対する意識に少なからず影響を与えている。佐賀県では中学校から部活動が始まるが，とりわけ，そうした部活動での上級生や先輩との交流が，ことばづかいを習得するうえで重要な機会になっていると考えられる。また，大学では，それまでの校種に比べて複雑かつ多様な人間関係がみられることや，大学生にふさわしいことばづかいを求められることなどが影響して，ことばづかいに対して気をつかう学生が多い。このように，ことばづかいに対する意識は校種によって異なることから，ことばづかいの指導にあたっては，児童・生徒・学生のこうした意識の違いを認識しておく必要がある。特に，中学校に進学したばかりの生徒は，ことばづかいに対する意識のうえで大きな変換を求められることから，中学校では，そうした意識の変化にも配慮したことばづかいについての指導が必要となる。

[1] 佐賀大学大学院　教育学研究科　研究生
[2] 佐賀大学大学院　教育学研究科
[3] 佐賀大学大学院　教育学研究科
[4] 佐賀市立城南中学校　教諭
[5] 唐津市立西唐津小学校　教諭
[6] 佐賀大学　文化教育学部　日本・アジア文化講座

1．はじめに

学校生活のなかで敬語をはじめとすることばづかいをどのようにするかということは，児童・生徒・学生にとって常に直面する問題といえ，教える側にとっても重要な問題といえる。

こうした学校生活におけることばづかいについての調査としては，これまでに，1988年から1992年にかけておこなわれた国立国語研究所による大規模な調査がある。しかし，国立国語研究所の調査とそれをふまえた尾崎（1997）以降，学校生活におけることばづかいについての具体的な調査・考察はないようである。国立国語研究所の調査から20年以上が経過していること，国立国語研究所の調査が東京（中学・高校），大阪（高校），山形（中学校）の生徒のみを対象としていることをあわせ考えると，こんにちの児童・生徒・学生が学校生活におけることばづかいに対してどのような意識を持っているのかを，それぞれの地域の実状をふまえつつ明らかにすることは重要なことであると思われる。

そこで，本稿では，学校生活におけることばづかいに対する意識について，佐賀県内における児童・生徒・学生を対象としたアンケート調査に基づき，分析したい。

2．アンケート調査の概要

本稿で使用するデータは，2012年６月から2014年６月にかけて，佐賀県内の児童・生徒・学生を対象としておこなったアンケート調査によるものである。調査項目は，1988年から1992年にかけておこなわれた国立国語研究所の調査項目のうち尾崎（1997）において分析・考察されている項目をもとに，調査項目の文言や選択肢を一部修正するなどして全15問を設定した。国立国語研究所の調査がおこなわれてから20年以上が経過していることもあり，調査項目の文言や選択肢を国立国語研究所の調査項目と揃えることはできなかった。だが，ある程度，おなじ調査項目にすることで，経年による違い，地域差をみることができるのではないかと考え，このようにして調査項目を設定した。

なお、1988年から1992年にかけておこなわれた国立国語研究所による調査，すなわち「学校の中の敬語」調査（アンケート調査）については、データ・調査票などが国立国語研究所のホームページで公開されている（http://www.ninjal.ac.jp/archives/gakkoukeigo/）。また、この調査のデータを分析したものは国立国語研究所（2002）として刊行されている。以降、本稿では、国立国語研究所の調査に言及するときには「国研（2002）」と示す。

本稿で使用するデータのもととなるアンケート調査は，佐賀県内の小学校，中学校，高等学校（以下，「高校」とする）の各１校と佐賀大学を対象としておこない，あわせて506名の回答を得ることができた[7]。各校種の回答者数は，以下のとおりである。佐賀大学については，各学年の学生を含んでいる。

小学校（４年生，６年生の計138名）
中学校（１年生，２年生，３年生の計189名）
高校（１年生，２年生，３年生の計116名）
佐賀大学（計63名）

本稿では，全15問のうち，おもにことばづかいに対する意識についてたずねた８問を対象として分析する。場面ごとの具体的なことばの使い分けなどについてたずねた残りの７問については稿をあらためる。また，経年による違い，地域差についての考察も別稿に譲ることとする。

[7] アンケートの配布と回収は，佐藤・石丸・江頭・大浦がおこなった。また，データの処理は佐藤を除く全員でおこない，分析と考察はおもに佐藤・石丸・野口・武本がおこなった。

3．アンケート調査からみえる佐賀県内の児童・生徒・学生のことばづかいに対する意識

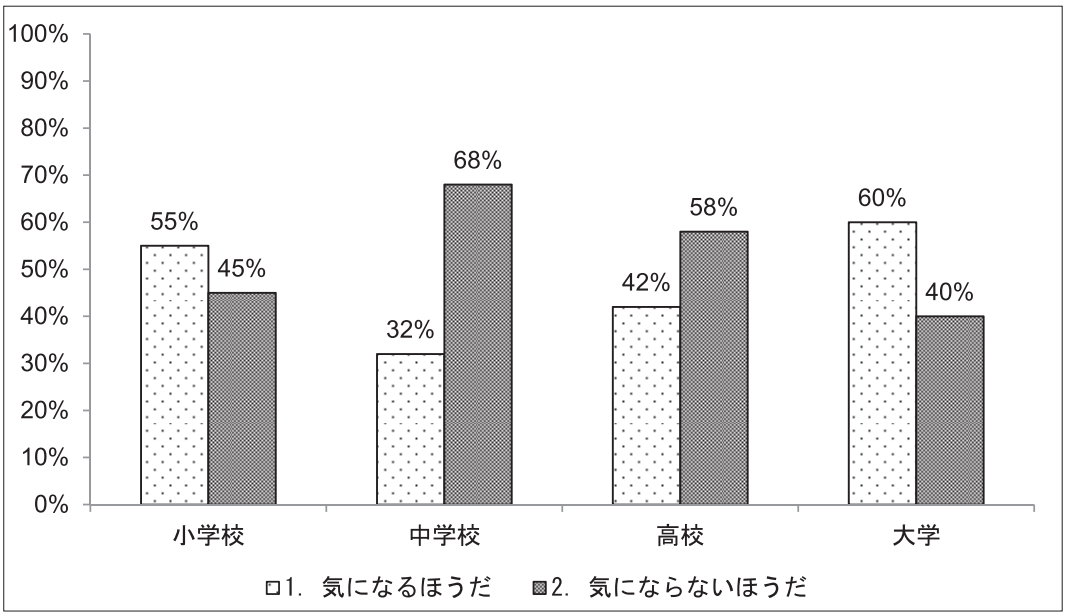
さて，ここでは，アンケート調査の結果に基づき，佐賀県内の児童・生徒・学生のことばづかいに対する意識を探っていく。具体的には，学校生活において，ことばづかいが気になるかどうか，ことばづかいで困った経験があるか，目上の人から注意・教示された経験があるか，どのような場面でことばづかいに気をつかうかといった質問や，ことばづかいに対してどのような意見を持っているのかといった質問に対する回答を分析することによって，佐賀県内の児童・生徒・学生のことばづかいに対する意識を明らかにする[8]。

3．1 学校でのふだんのことばづかいが気になるか

質問１では，学校でのふだんのことばづかいが気になるかどうかをたずねた。質問１は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ１**のようになる。以下，本稿ではアンケート調査の集計結果を割合で置き換えて示し，グラフにまとめる。なお，小数点以下については，四捨五入する。

【質問１】ふだん，学校で，自分のことばづかいが気になるほうですか。

１．気になるほうだ　　２．気にならないほうだ



【グラフ１：学校におけるふだんのことばづかいが気になるか】

グラフ１からわかるように，全体として，小学校と大学では，学校におけるふだんのことばづかいが

[8] 国研（2002）では，「敬語行動の具体的な実現の仕方を決定するものが，敬語行動に関する「意識」である」としたうえで，様々な質問を設定している。今回のアンケート調査の質問は，この国研（2002）をもとに設定したものであるが，このうち質問１～５は，そうした意識のなかでも，「現状をどう評価し，どう感じているか（好悪・美醜など）」といった「評価・感覚」に関するものである。一方，質問６～８は，「敬語行動は本来どのようなものであるべきだと自ら信じるか」といった「信念・期待」，および，「所属する集団ではどのようにすべきだとされていると思うか」といった「規範」に関するものであり，ことばづかいに対する意識のなかでも「「意見」に近い性格を持つもの」である。

「１．気になるほうだ」と答えた人の割合が高く，中学校と高校では「２．気にならないほうだ」と答えた人の割合が高い。小学校では55％が，大学では60％が「１．気になるほうだ」と回答している。一方，中学校では68％が，高校では58％が「２．気にならないほうだ」と答えている。以下，こうした結果となった背景を校種ごとに考えてみよう。

まず，小学校では，学校でのことばづかいが「１．気になるほうだ」と答えた児童が55％となっており，「２．気にならないほうだ」と答えた児童よりも多いことがわかるが，これは，学校のなかで，ことばづかいの指導が細かくなされていることと関係しているのではないかと思われる。

たとえば，小学校では，学習の場面における発表の型が教えられ，また，相手を意識した発言についての指導が細かくなされる。その結果，小学校の児童は，「わたしは○○と思います」「同じです」「○○さんの意見につけくわえます」などの発表の型を意識しながら発話するようになる。さらに，小学校では，職員室や図書室などへの出入りをするときなど，様々な機会をとらえたことばづかいの指導がなされる。つまり，このような指導の結果，小学校では，学校でのことばづかいが気になる児童が少なからずいるのではないかと考えられる。

次に，中学校をみると，学校でのことばづかいが「２．気にならないほうだ」と答えた生徒が68％となっており，「１．気になるほうだ」と答えた生徒よりも多いことがわかる。高校も同様で，「２．気にならないほうだ」と答えた生徒が58％と「１．気になるほうだ」と答えた生徒より多い。このように中学校と高校では，小学校とは相反する結果となっていることがわかるが，これは，中学校と高校では，小学校のような様々な機会をとらえたことばづかいに対する指導が少なくなることや，気の置けない同級生との交流に重きが置かれるようになっていくことなどが影響しているのではないかと思われる。

ところで，国研（2002）が指摘するように，学校社会は「職場社会ほど人間関係が複雑ではなく」かつ「知らない人や外部の人との接触の頻度や公式性の高い場面で発言する頻度がそれほど高くない社会」といえる。このことは，小学校についてもいえることであるので慎重に検討する必要はあるが，とりわけ外の社会と接する機会が次第に増えてくる中学校と高校の生徒にとっては，人間関係が複雑な外の社会に比べれば，学校という内の社会はことばづかいをそれほど気にしなくても良い社会と感じられるのではないだろうか。このようなことから，生徒どうしの関係，たとえば気の置けない同級生との交流に比較的，重点が置かれるようになる中学校と高校の生徒は，自分のことばづかいをそれほど気にせずに学校生活を送っているのではないかと考えられる。

そして，大学生についてみると，学校でのことばづかいが「１．気になるほうだ」と答えた学生が60％となっており，「２．気にならないほうだ」と答えた学生よりも多い。これは，様々な理由が考えられるが，やはり，大学という学校の形態がそれまでの校種とは大きく異なることが関わっているのではないかと思われる。大学は，固定したいわゆるクラスはなく，流動的であることから，大学での人間関係は，それまでの学校と比べて複雑かつ多様といえる。また，大学では，大学生にふさわしいことばづかいが求められる。そうしたことから，大学では，学校のなかでもことばづかいを気にしなければならないことが多くあるのではないかと考えられる。

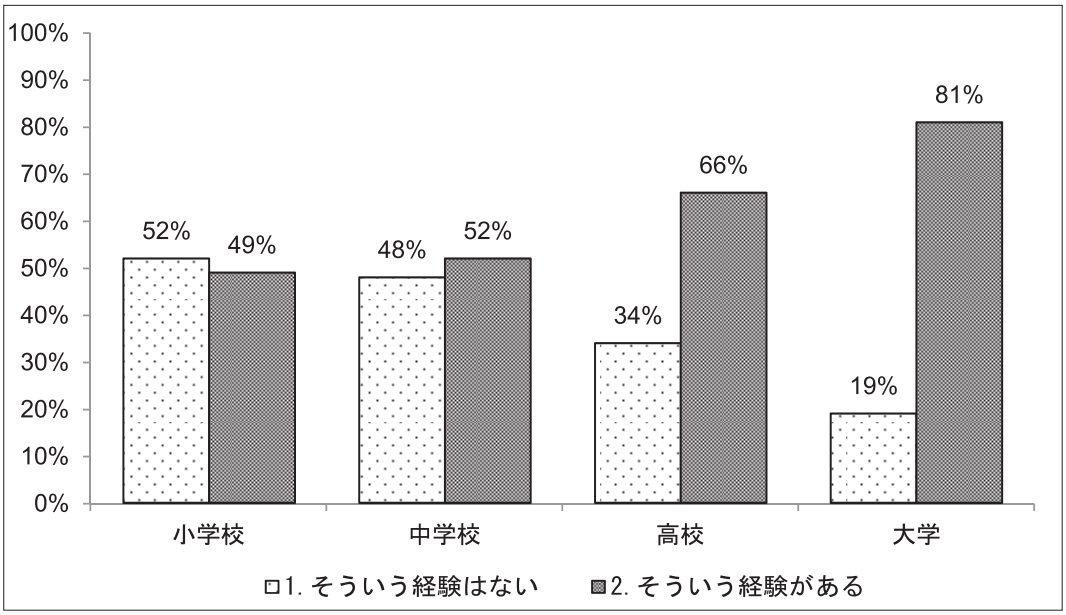
以上のように，様々な機会をとらえたことばづかいの指導がなされる小学校では，児童は，学校でのことばづかいが気になる傾向にある。一方，中学校と高校では，そうした様々な機会をとらえたことばづかいの指導が減ることや気の置けない同級生との交流に重きが置かれるようになっていくことなどが影響して，ことばづかいが気にならないとする生徒が多くなる。そして，大学では，複雑かつ多様な人間関係や，大学生にふさわしいことばづかいが求められることなどが影響して，ことばづかいを気にする学生が少なからずいることがわかった。

3．2 先生や上級生に対することばづかいで困った経験があるか

質問２では，先生や上級生といった目上の人に対することばづかいのことで，困った経験があるかどうかをたずねた。質問２は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ２**のようになる。

【質問２】これまでに，先生や上級生へのことばづかいのことで困った経験はありますか。たとえば，「どういうことばづかいをしたらよいかわからなかった」「もっと別の言い方をしなければならないのにまちがえた」など。

１．そういう経験はない　　２．そういう経験がある



【グラフ２：先生や上級生に対することばづかいで困った経験があるか】

グラフ２によると，小学校では，先生や上級生へのことばづかいで困った経験があるかという質問について，「１．そういう経験はない」と答えた児童の割合が「２．そういう経験がある」と答えた児童の割合をやや上回っていることがわかる。ところが，中学校，高校，大学と校種が進むにしたがって，「２．そういう経験がある」との回答が次第に増加する。「２．そういう経験がある」と答えた人の割合に注目してみると，小学校49％，中学校52％，高校66％，大学81％とその割合が次第に高くなっていくことがわかる。つまり，校種が進むにつれて，先生や上級生へのことばづかいで困ることが多くなるものといえる。

ここでは，この結果について，ひとまず，小学校・中学校・高校に注目して，さきにみた質問１の結果とも関わらせながら考えてみたい。

さて，３．１でみた質問１の結果（前掲，グラフ１）もふまえつつグラフ２をみると，大局的にみれば，小学校では学校でのふだんのことばづかいが気になることが多いといえるものの，先生や上級生に対することばづかいで困ることはそれほど多くないということになる。一方，中学校と高校では学校でのふだんのことばづかいが気にならないことが多いといえるものの，先生や上級生に対することばづかいで困ることは比較的多くあるということになる。とりわけ，高校では，その傾向が顕著である。このように，小学校・中学校・高校についてグラフ１とグラフ２をみると，相反する結果を示しているようにみえるが，こ

れには，次のようなことが考えられる。

すなわち，まず，小学校では，３．１でみたように，様々な機会をとらえたことばづかいに対する指導がなされることなどが影響して，学校でのふだんのことばづかいが気になる児童が少なからずいる。だが，実際には，ことばづかいを気にする必要がある目上の人は日常生活を共にする先生に限られ，上級生との上下関係も中学校や高校に比べて厳格ではない。また，小学校の児童の場合，実際には目上の人に対して正しいことばづかいができなかったとしても，困った経験として認識されない可能性がある。そのため，小学校では，先生や上級生に対することばづかいで困った経験はないと答えた児童の割合が，困った経験があると答えた児童の割合よりも，わずかながら高いのではないかと思われる。

そして，中学校と高校では，３．１でみたように，小学校のような様々な機会をとらえたことばづかいに対する指導が減ることや，気の置けない同級生との交流に重きが置かれるようになっていくことなどが影響して，学校でのふだんのことばづかいも小学校に比べて気にしなくなる。だが，その一方で，中学校と高校では，学校のなかで接する先生や上級生を“目上の人”として意識することが多くなるのではないかと思われる。学校以外の場で目上の人と接することも次第に増えてくる中学校と高校の生徒は，学校では，先生や上級生を目上の人として位置づけるようになる。そして，目上の人に対することばづかいの正誤も認識されるようになり，誤ったことばづかいをしたり，どのような言い方をすればよいか分からなかったりした場合には，それが困った経験として認識されるようになる。そのため，校種が進むにつれて先生や上級生に対することばづかいで困った経験があると答えた生徒の割合が増えるのであろう。

このようなことから，結果として，小学校・中学校・高校についてグラフ１とグラフ２をみると，相反する結果を示しているようにみえるのではないかと考えられる。

さいごに，大学についてみると，大学では，グラフ１でみたように学校でのふだんのことばづかいが気になるばかりでなく，グラフ２からわかるように，先生や上級生に対することばづかいで困った経験があると答えた学生の割合は81％と極めて高いことがわかる。これは，３．１でも述べたように，大学での人間関係はそれまでの校種に比べて複雑かつ多様であること，また，大学生にふさわしいことばづかいが求められることなどが影響しているのではないかと思われる。そうしたことが影響して，大学の学生は，学校でのふだんのことばづかいが気になり，かつ，ことばづかいで困るような場面に直面することも多いのではないかと考えられる。

以上のように，先生や上級生に対することばづかいで困った経験がある人は，校種が進むにつれ増加することがわかった。詳細については繰り返さないが，ここまでの考察からわかるように，ことばづかいに対する意識は，校種によって一様ではないといえる。

３．３先生や上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験があるか

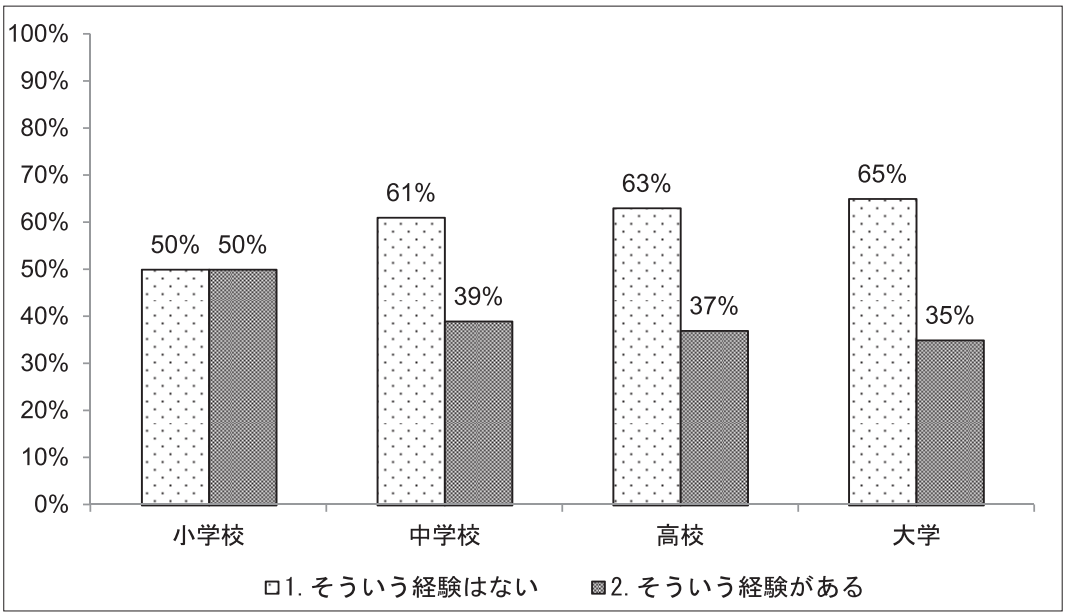
さて，敬語を含むことばづかいの習得には，他人からの注意や教示，すなわち指導が少なからず関わっていると思われる。国研（2002）では，「先生や上級生・先輩から，ことばづかいのことで注意されたり，教えられたりしたことがありますか」という質問によって，目上の人からことばづかいに対する指導を受けた経験があるかどうかをたずねている。ただし，学校という社会をあらためて考えてみると，ひとくちに“目上の人”といっても，先生と上級生・先輩とでは，その位置づけは必ずしもおなじとはいえない。そこで，本調査では，ことばづかいを注意・教示された経験について，先生と上級生・先輩とに分けて，その経験があるかどうかをたずねた。ここでは，その結果について，詳しくみていく。

3．3．1 先生からことばづかいを注意・教示された経験があるか

まず，質問３では，“先生から”ことばづかいを注意・教示されたことがあるかをたずねた。質問３は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ３**のようになる。

【質問３】先生から，ことばづかいのことで注意されたり，教えられたりしたことがありますか。

１．そういう経験はない　　２．そういう経験がある



【グラフ３：先生からことばづかいを注意・教示された経験があるか】

グラフ３によると，小学校では，先生からことばづかいを注意・教示された経験について「１．そういう経験はない」と答えた児童が50%，「２．そういう経験がある」と答えた児童が50%と同じ割合になっている。だが，「２．そういう経験がある」と答えた人の割合に注目してみると，小学校の「２．そういう経験がある」50%という割合は，中学校39%，高校37%，大学35%に比べて高いことがわかる。

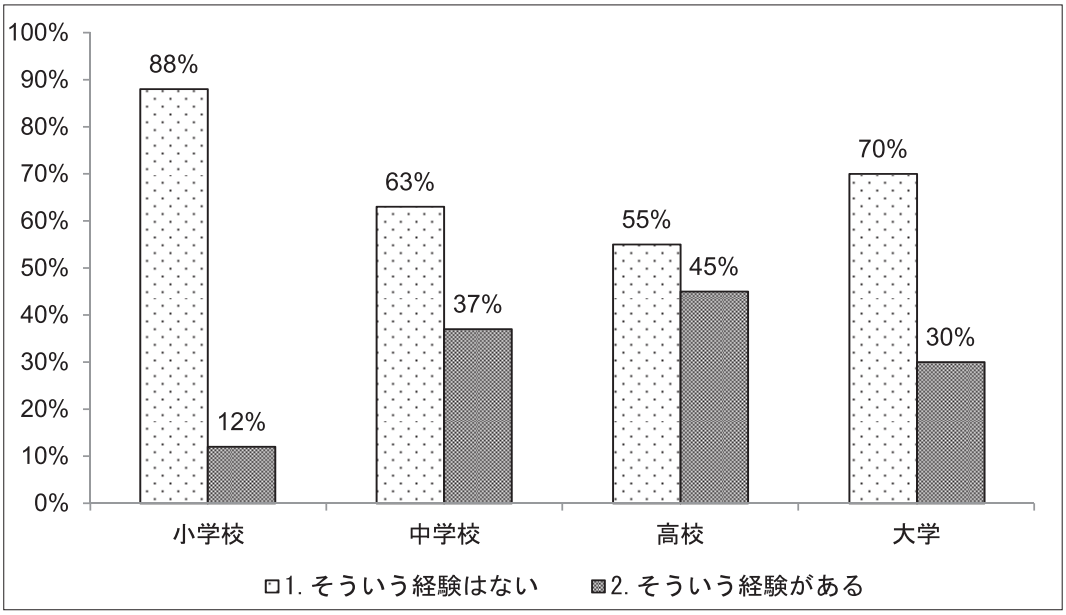
このように，先生からことばづかいを注意・教示された経験は，中学校・高校・大学よりも小学校において多いといえる。３．１において，小学校では，様々な機会をとらえたことばづかいの指導がなされていることが影響して小学校の児童は中学校と高校の生徒に比べてことばづかいが気になる傾向にあることを指摘したが，質問３の結果は，そうした傾向を裏付けるものといえよう。小学校の児童は，おもに“先生から”様々な機会をとらえたことばづかいの指導がなされることが多く，その結果，学校でのことばづかいが気になることが多いのではないかと考えられる。

3．3．2 上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験があるか

では，おなじ目上の人でも，上級生や先輩といった先生以外の目上の人から注意・指導された経験はどうであろうか。質問４では，“上級生・先輩から”ことばづかいを注意・教示されたことがあるかをたずねた。質問４は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ４**のようになる。

【質問４】上級生・先輩から，ことばづかいのことで注意されたり，教えられたりしたことがありますか。

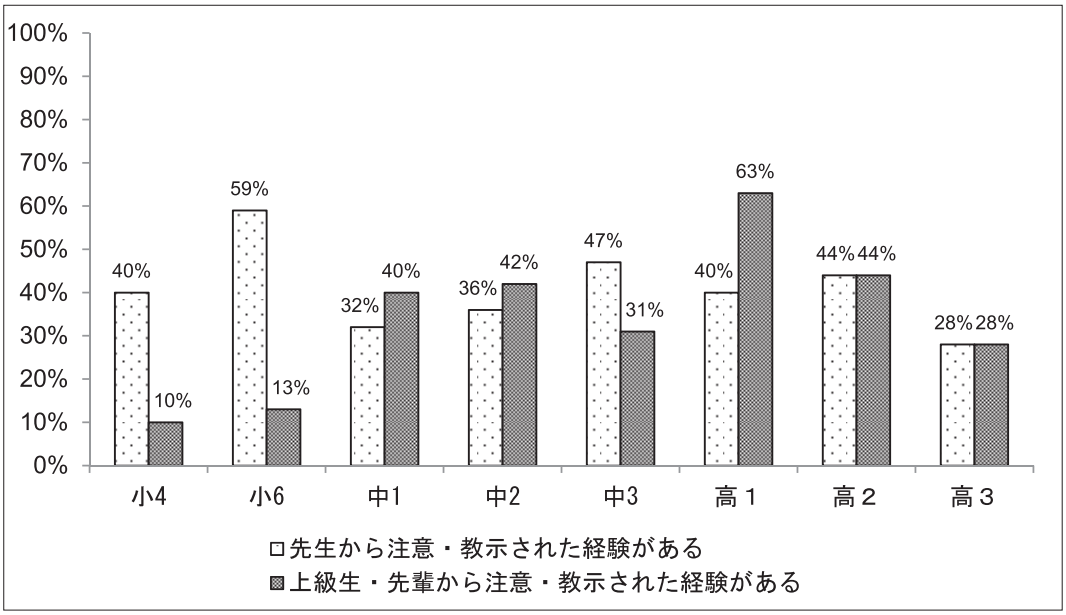
１．そういう経験はない　　２．そういう経験がある



【グラフ４：上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験があるか】

グラフ４によると，どの校種においても，上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験について，「１．そういう経験はない」と答えた人の割合が，「２．そういう経験がある」と答えた人の割合を上回っている。だが，「１．そういう経験はない」と答えた人の割合に注目してみると，とりわけ小学校において，「１．そういう経験はない」と答えた児童の割合が高いことがわかる。グラフ４によれば，88％の小学校の児童が上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験について「１．そういう経験はない」と答えている。

ここで，この結果を，先生からことばづかいを注意・教示された経験があるかどうかをたずねた質問３の結果（前掲，グラフ３）と比較してみよう。次に示す**グラフ５**は，“先生から”ことばづかいを注意・教示された経験があるかどうかをたずねた質問３の結果と“上級生・先輩から”ことばづかいを注意・教示された経験があるかどうかをたずねた質問４の結果を，学年別にまとめたものである。ここでは，ふたつの質問の結果を重ね，さらに学年別にみることで，学校における目上の人からの指導がどのように推移しているのかを詳しくみる。なお，大学については，さきにも述べたように，学校の形態がそれまでの校種とは大きく異なるといえることから，先生や上級生・先輩をそれまでの校種とおなじに扱うことはできないと思われるので，ここでは対象としない。



【グラフ５：質問３と質問４における「2. そういう経験がある」の学年別結果】

さて，グラフ５によれば，グラフ４においてもみたように，まず，小学校では，“先生から”ことばづかいを注意・教示された経験があると答えた児童の割合が“上級生・先輩から”注意・教示された経験があると答えた児童の割合より高いことがわかる。この傾向は，中学校と高校に比べてみると，顕著である。一方，中学校と高校では，“上級生・先輩から”注意・教示された経験あると答えた生徒の割合が増え，中１，中２，高１のように学年によっては“先生から”注意・教示された経験があると答えた生徒の割合を上回る。学年別にみると，当然ながら，学年があがるにつれ，つまり，みずからが上級生・先輩になるにつれ，上級生・先輩からの注意・教示は少なくなる。

しかし，ここでもっとも注目すべきは，小学校から中学校へ，中学校から高校へといった進学を契機として，上級生・先輩からの注意・教示が多くなるということであろう。上級生・先輩からことばづかいを注意・教示された経験について，あらためてグラフ５をみると，小６では13％に過ぎなかった「２．そういう経験がある」の割合が，中１では40％と急激に高くなっていることがわかる。また，中３では31％だった「２．そういう経験がある」の割合が，高１では63％と急激に高くなっている。

このように，中１と高１で上級生・先輩からことばづかいを注意・教示されたが経験あると答えた生徒の割合は直前の学年と比べて高い傾向にある。そして，とりわけ，おもに“先生から”ことばづかいを注意・教示されることが多い小学校を卒業し，中学校に進学するときに，おなじ目上の人でも誰から注意・教示されるかということに大きな変化がみられるといえそうである。中学校に進学すると，“先生から”だけではなく“上級生・先輩から”もことばづかいについて注意・教示されるようになる。

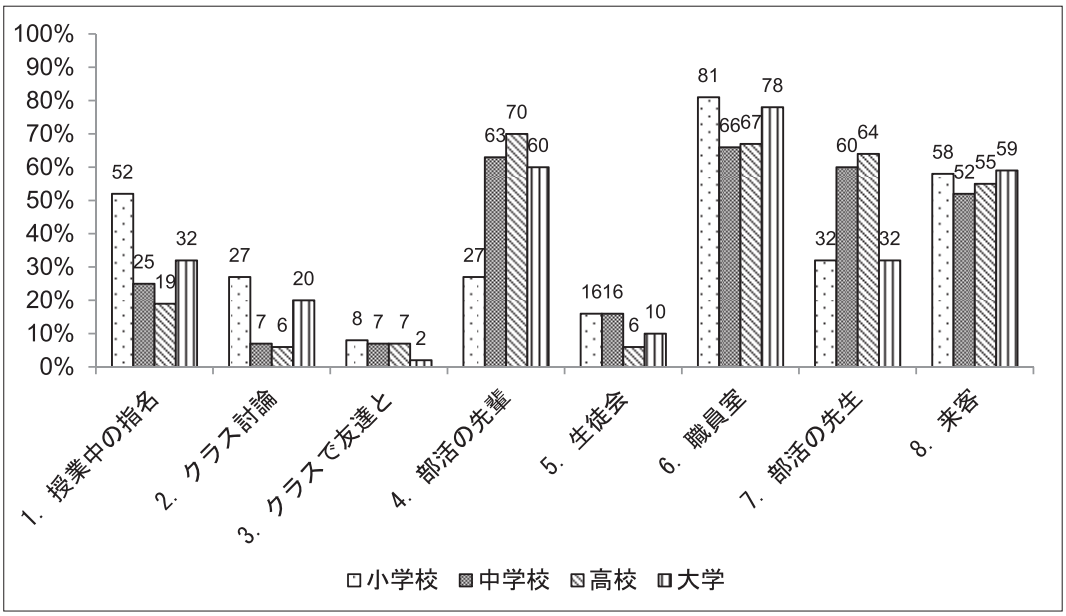
以上のように，学校のなかで誰からことばづかいについて注意・教示されることが多いかということは校種によって異なることがわかった。小学校では，おもに先生からことばづかいを注意・教示される。それが，中学校と高校では，先生からだけではなく上級生・先輩からもことばづかいを注意・教示されるようになるが，このことはつまり，中学校と高校では，上級生や先輩が学校でのことばづかいに，何らかのかたちで影響を与えていることを意味しているのではないかと思われる。なお，大学については，学校の形態がそれまでの校種とは大きく異なることから，先生や上級生・先輩をそれまでの校種とおなじに扱うことはできないと思われるので，質問項目を検討するなどして，あらためて調査したい。

3．4 学校生活でことばづかいに気をつかうのはどのような場面か

質問５では，学校生活でことばづかいに気をつかうのはどのような場面であるのかをたずねた。具体的には，８つの場面を設定し，そのなかから，ことばづかいに特に気をつかう場面を３つ選んでもらうようにした。質問５は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ６**のようになる[9]。なお，以下，本文中とグラフ６では，８つの選択肢を「１．授業中の指名」のように略して示す。

【質問５】学校生活にはいろいろな場面があります。次のうちで，あなたがことばづかいに気をつかうのはどんな時ですか。特に気をつかうもの３つに○をつけてください。

１．授業中に先生に指名されて答えたり意見を言ったりするとき
２．クラス討論で立ち上がって意見を発表するとき
３．クラスの中で，友だちと話すとき
４．部（クラブ）活動で，上級生や先輩と話すとき
５．生徒会の活動や集会で，討論したり，意見を発表したりするとき
６．職員室に用事で入っていって，先生と話すとき
７．部（クラブ）活動で，顧問の先生やコーチの人と話すとき
８．学校に来た見知らぬ来客に，部屋などをたずねられて教えるとき



【グラフ６：「学校生活でことばづかいに気をつかう場面」における選択肢別結果】

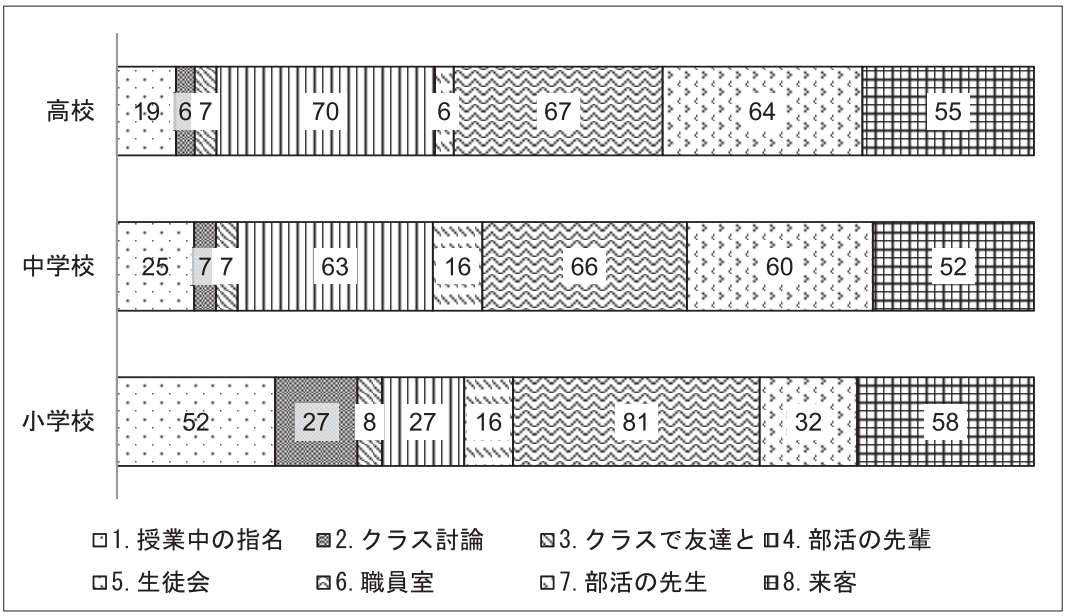
まず，グラフ６を校種に関わらずみると，学校生活でことばづかいに気をつかう場面として比較的多くあげられているのは，「４．部活の先輩」「６．職員室」「７．部活の先生」「８．来客」であることがわか

[9] グラフ６では，当該選択肢を「学校生活でことばづかいに特に気をつかう時」の３つのうち１つとして選んだ人が，各校種の全回答者のうち何割いるかを示した。たとえば，「１．授業中の指名」の小学校52％という値は，この選択肢を「学校生活でことばづかいに特に気をつかう時」の３つのうち１つとして選んだ小学校の児童が，回答した小学校の全児童138人のうち72人いたことに基づき計算したものである。

る。一方，「１．授業中の指名」「２．クラス討論」「３．クラスで友達と」「５．生徒会」をことばづかいに気をつかう場面として選んだ人の割合は，それほど高くない。つまり，学校生活では，おもに先生や先輩，来客といった目上の人との場面において，ことばづかいに気をつかう傾向にあるといえる。

しかし，グラフ６を詳しくみると，どのような場面でことばづかいに気をつかうかということもまた，これまでみてきた質問に対する回答結果がそうであったように，校種によって一様ではないようである。

そこで，おなじ質問６について，校種別にまとめなおしたものが，**グラフ７**である。なお，大学については，回答の選択肢と学校の実態が一致していないといわざるをえない。たとえば，大学に「生徒会」や「職員室」はない。そこで，大学については以降，ここでは対象としない。



【グラフ７：「学校生活でことばづかいに気をつかう場面」における校種別結果】

グラフ７をみると，まず，小学校では全体的にみて，先生と接するような場面でことばづかいに気をつかっているといえそうである。グラフ７のうち小学校に注目してみると，学校生活でことばづかいを気にする場面として，「１．授業中に先生に指名されて答えたり意見を言ったりするとき」を３つのうち１つとして選択した児童は回答者全体の52%，「６．職員室に用事で入っていって，先生と話すとき」を３つのうちの１つとして選択した児童は回答者全体の81%となっており，他校種に比べて，これらの選択肢を回答した人の割合が高くなっている。

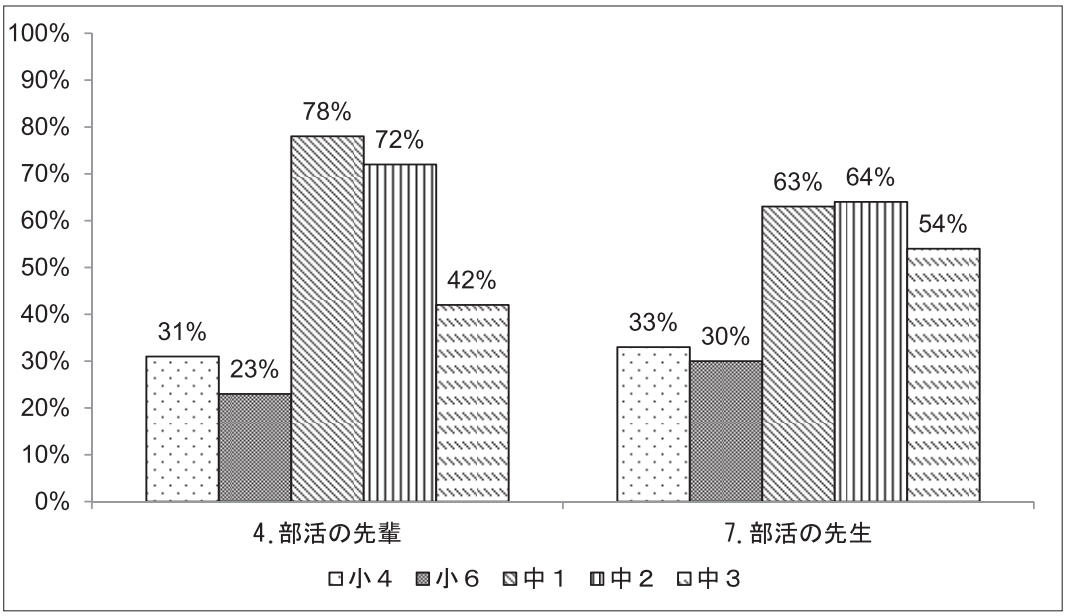
そして，中学校と高校では，小学校に比べて部活動に関わるような場面でことばづかいに気をつかうとする生徒が多いことがわかる。グラフ７によれば，「４．部（クラブ）活動で，上級生や先輩と話すとき」に気をつかうとする人の割合は，小学校が27%とそれほど高くないのに対して，中学校では63%，高校では70%と高いことがわかる。同様に，「７．部（クラブ）活動で，顧問の先生やコーチの人と話すとき」に気をつかうとする人の割合は小学校が32%とそれほど高くないのに対して，中学校では60%，高校では64%と高いことがわかる。

これらのことについて，これまでの分析をふまえつつ，さらに考えてみると，まず，先生と接するような場面でことばづかいに気をつかう小学校の児童が比較的多くいることについては，３．３で明らかにしたような，小学校の児童は先生からことばづかいを注意・教示された経験が他校種に比べて多いという実態（前掲，グラフ３およびグラフ５）を反映しているといえる。

そして，部活動に関わるような場面でことばづかいに気をつかうとする中学校と高校の生徒が多いことについては，中学校と高校では先生からだけではなく上級生・先輩からもことばづかいを注意・教示されるようになるという実態（前掲，グラフ３・４・５）を反映しているといえる。３．３では，そうした実態をふまえ，中学校と高校では上級生や先輩が学校生活におけることばづかいのうえで何らかのかたちで影響を与えているのではないかということを示唆したが，ことばづかいのうえで何らかのかたちで影響を与える上級生や先輩とは，具体的には部活動のなかで接する上級生や先輩であるといえそうである。

ここで，佐賀県の学校の実状をかんがみると，佐賀県では，中学校になると部活動が始まる。つまり，中学校の生徒は，日常的かつ継続的におこなわれる部活動のなかで，先生からの指導だけではなく，小学校では経験することが少なかった上級生・先輩からのことばづかいの指導を受けることになるのではないだろうか。

そこで，さらにここでは，ことばづかいにおける部活動の影響をみるために，質問５のなかでも部活動と関連する選択肢である選択肢４と７について，部活動の始まる前の小学校と始まった後の中学校とに分けて，学年別に詳しくみたい。次に示す**グラフ８**は，学校生活のなかでことばづかいに気をつかう場面として，「４．部（クラブ）活動で，上級生や先輩と話すとき」（以下，「４．部活の先輩」とする）と「７．部（クラブ）活動で，顧問の先生やコーチの人と話すとき」（以下，「７．部活の先生」とする）を３つのうちの１つとして回答した小学校の児童と中学校の生徒の割合を学年別にまとめたものである。



【グラフ８：「４．部活の先輩」「７．部活の先生」の小中の学年別結果】

グラフ８によれば，小６と中１のあいだに，大きな差がみられることがわかる。学年別に比較してみると，学校生活のなかでことばづかいに気をつかう場面として「４．部活の先輩」をあげた人の割合は，小６が23％であるのに対して中１は78％となっており，小６から中１のあいだで，その割合が急激に高くなっている。同様に，学校生活のなかでことばづかいに気をつかう場面として「７．部活の先生」をあげた人の割合は，小６が30％であるのに対して中１は63％と，やはり，小６から中１のあいだで，その割合が高くなっていることがわかるが，「４．部活の先輩」と「７．部活の先生」をあげた人の割合をさらに詳しくみると，とりわけ「４．部活の先輩」をあげた人の割合が中１と中２で極めて高いことがわかる。つまり，中学校では，部活動で上級生や先輩と話すときに，ことばづかいに特に気をつかっているということ

ができる。なお，小４から小６，中１から中２，中３へと学年があがるにつれて，「４．部活の先輩」と答えた児童・生徒の割合が下がるのは，話し手自身が上級生・先輩となるためであると考えられる。

以上のように，ここでは，学校生活のなかでことばづかいに気をつかうのはどのような場面であるのかをみてきた。ひとつひとつの選択肢についてさらに詳しくみていく必要はあるが，全体として，小学校では先生と接するような場面において，中学校と高校では部活動に関わるような場面においてことばづかいに対してとりわけ気をつかう傾向にあるといえる。

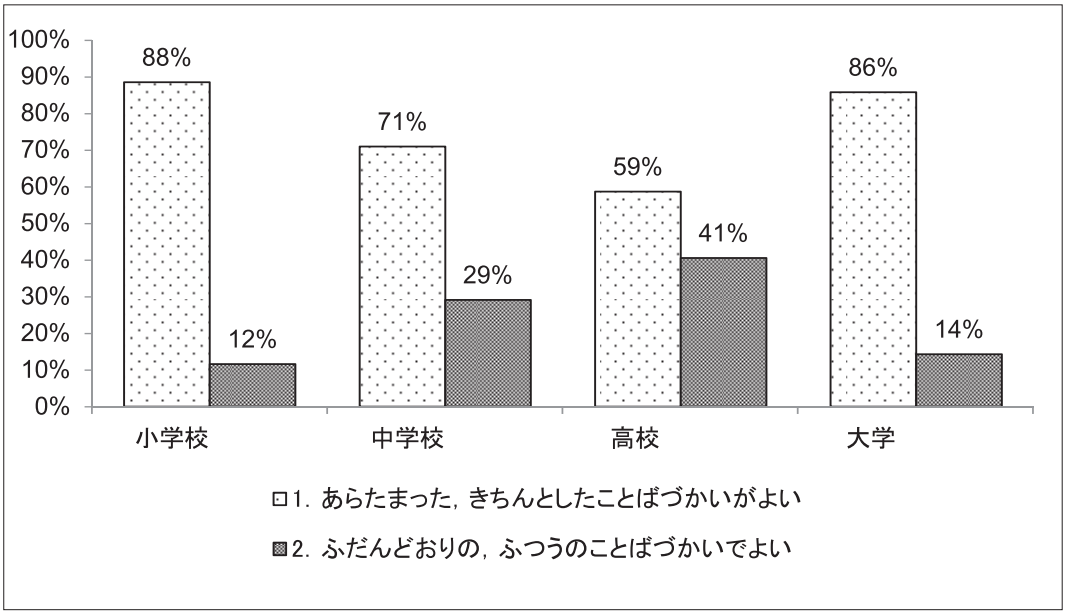
そして，ここまでの分析をみわたすと，学校の形態が大きく異なる大学を別とすれば，小学校から中学校に進学するときに，ことばづかいに対する意識のうえで大きな変化があるということができそうである。小学校では“先生”が学校生活でのことばづかいに対する意識のうえで大きな影響を与えている。一方，中学校と高校では先生だけでなく“上級生や先輩”が，学校生活でのことばづかいに対する意識に少なからず影響を与えているものと考えられる。

３．５クラス討論や授業での発言におけることばづかいについてどのように思うか

質問６では，クラス討論や授業での発言の際に，改まったことばづかいをした方がよいと思うかどうかをたずねた。これは，ここまでの質問とは異なり，ことばづかいに対してどのような意見を持っているのかをたずねたものである。質問６は，以下のとおりである。その結果をまとめると**グラフ９**のようになる。

【質問６】今のあなたのクラスを考えて，クラス討論や授業での発言の時は，ふだんのことばづかいとは少しちがった，あらたまったことばを使うのがよいと思いますか。それとも，ふだんどおりのことばづかいでよいと思いますか。

１．あらたまった，きちんとしたことばづかいがよい
２．ふだんどおりの，ふつうのことばづかいでよい



【グラフ９：クラス討論や授業での発言におけることばづかいについてどのように思うか】

グラフ９をみると，どの校種においても，クラス討論や授業での発言におけることばづかいについては，改まった方がよいと考えている児童・生徒・学生が多いことがわかる。これは，学校生活のなかでも，授業という場が公式なものであることを反映しているものといえる。

そして，クラス討論や授業での発言におけることばづかいは改まった方がよいと考える人は，小学校と大学でとりわけ多いことがわかる。グラフ９によれば，クラス討論や授業での発言におけることばづかいは「１．あらたまった，きちんとしたことばづかいがよい」とする人の割合は，小学校で88％，大学で86％となっており，「２．ふだんどおりの，ふつうのことばづかいでよい」とする人の割合を大きく上回っている。一方，中学校と高校では，ふだんどおりでよいとする人も少なからずみられる。中学校の生徒29％，高校の生徒41％が，ふだんどおりでよいと回答している。

さて，ここで思いあたるのは，３．１でみた学校でのことばづかいが気になるほうかどうかをたずねた質問１との関連である。３．１でみたように，学校でのことばづかいが気になるほうだとする人は小学校と大学で多く，一方，中学校と高校では，学校でのことばづかいが気にならないほうだとする生徒が，気になるほうだとする生徒を上回る（前掲，グラフ１）。

つまり，学校でのことばづかいが気になるという感覚を持っている小学校の児童と大学の学生は，クラス討論や授業での発言においては，「ふだんのことばづかいとは少しちがった，あらたまったことばを使うのがよい」という意見を持っているということができる。

まず，小学校では，これまでみてきたように，先生からことばづかいを注意・教示された経験がある児童が多く，また，先生と接するような場面においてことばづかいに気をつかう傾向があった。そうした点からも，グラフ９にみられるように，クラス討論や授業でのことばづかいは改まった方がよいと考える児童が多くいるということは，首肯できよう。また，３．１でも指摘したような，小学校ならではの授業のあり方も少なからず関わっていると思われる。小学校の授業では，児童は先生からの発問を受け，挙手をし，指名され，起立し，発表をおこなうという場合が多い。先生に向けて発表することや起立をした状態での発言であること，さらに他の児童が発言を聞いていることなどによって，児童の発言は公式なものとならざるをえない。授業での発言が公式なものであるため，小学校では，クラス討論や授業でのことばづかいは改まった方がよいと考える児童が多くいると考えられる。

そして，大学では，講義形式の授業も少なくないが，少なくとも演習形式の授業では，大学生にふさわしい発言が求められることから，ことばづかいに対して気になることも多く，また，授業内では改まった方がよいと考える学生が多くいるものと思われる。

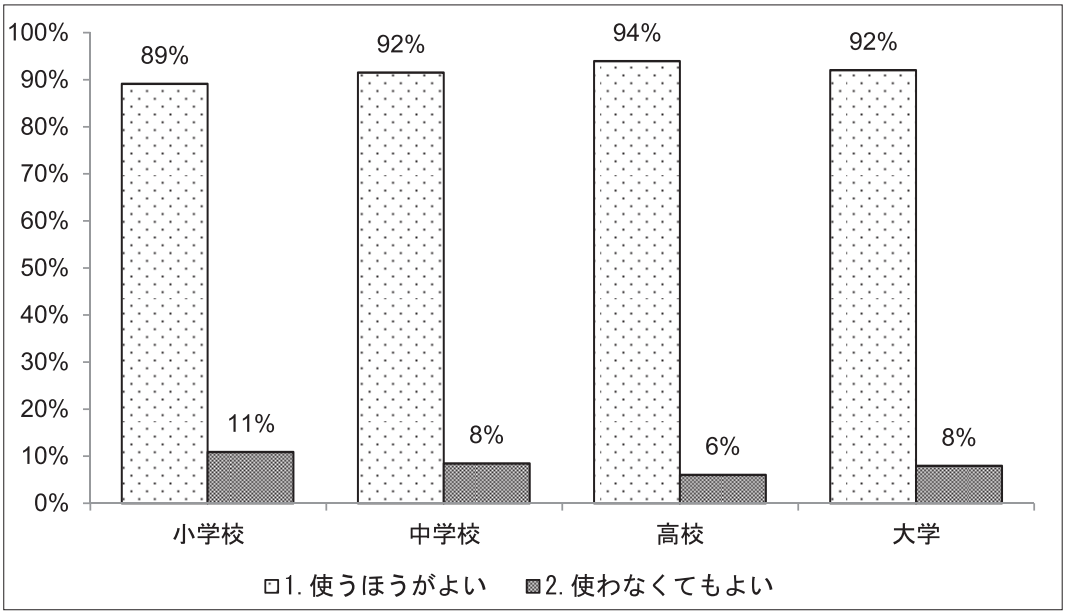
以上のように，多くの児童・生徒・学生は授業という公式の場におけることばづかいは改まった方がよいと考えている。とりわけ，学校でのことばづかいが気になるとする人が多い小学校と大学においては，そのように考える児童・学生が多くいるものとみられる。また，このことは，ことばづかいに対する感覚や意見といった様々な意識が連動して，学校でのことばづかいのありよう，具体的には敬語行動に作用していることを示唆するものといえる。

３．６上級生や部活動の先輩に敬語を使うほうがよいか

質問７では，ことばづかいのなかでも重要な位置を占めると考えられる敬語について，上級生や部活動の先輩などに使うほうがよいかどうかをたずねた。質問７は，以下の通りである。その結果をまとめると**グラフ10**のようになる。

【質問７】学校の中では生徒同士であっても，上級生や部（クラブ）活動の先輩などには敬語（ていねいで，相手をうやまったことば）を使うほうよいでしょうか，使わなくてもいでしょうか。

１．使うほうがよい　　２．使わなくてもよい



【グラフ10：上級生や部活動の先輩に敬語を使うほうがよいか】

グラフ10をみると，どの校種においても上級生や部活動の先輩に敬語を「１．使うほうがよい」とする人の割合が９割前後と極めて高いことがわかる。つまり，どの校種においても，上級生や部活の先輩に対しては敬語を使用しなければならないという意見を持っているといえる。

クラス討論や授業での発言におけることばづかいについてどのように思うかをたずねた質問６では，校種によってそれぞれの意見の多寡に差がみられたが（前掲，グラフ９），本質問では，校種による違いはほとんどみられなかった。

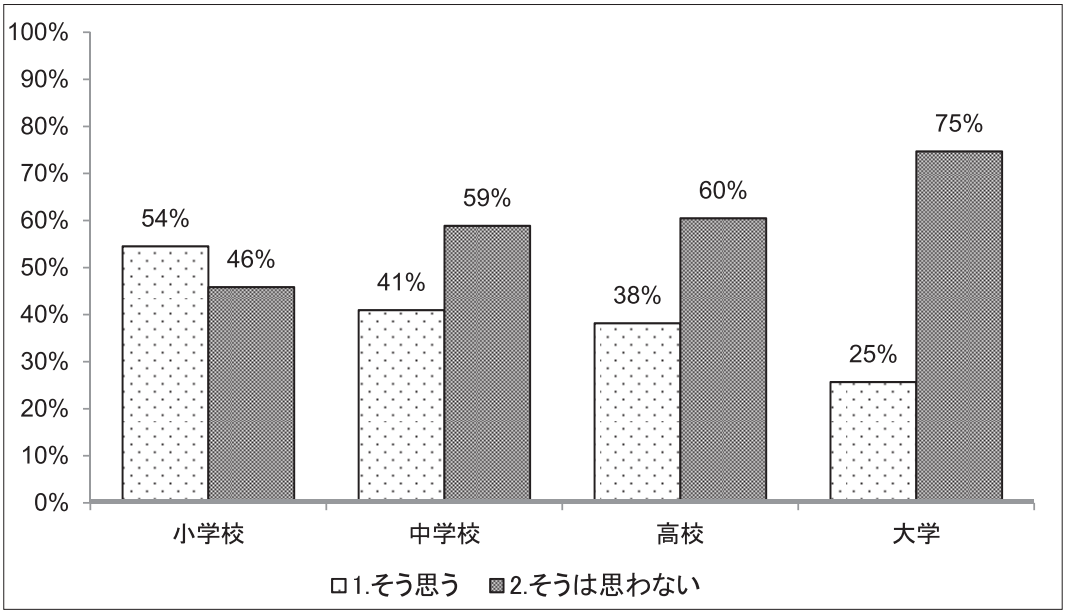
つまり，それぞれの校種の児童・生徒・学生は，学校では上級生や部活動の先輩には敬語を使うほうがよいという考えを，いわば一般的な知識として持っているということができる。たとえば，上級生や先輩からことばづかいを注意・教示された経験が少ない小学校の児童であっても（前掲，グラフ４），上級生や部活動の先輩には敬語を使わなければならないという知識を少なからず持っているものと考えられる。

３．７目上の人に敬語を使うことでよそよそしくなると思うか

質問８では，先生や上級生といった目上の人に対して敬語を使うと目上の人とのつきあいがよそよそしくなると思うかどうかをたずねた。質問８は，以下のとおりである。その結果をまとめると，**グラフ11**のようになる。

【質問８】先生や上級生に対してていねいな敬語をつかうと，どうしてもよそよそしくなって，親しい心の交流やざっくばらんな（気楽な）つきあいがしにくくなる，という意見があります。あなたは，この意見を…。

１．そう思う　　２．そうは思わない



【グラフ11：目上の人に敬語を使うことでよそよそしくなると思うか】

グラフ11によると，「先生や上級生に対してていねいな敬語をつかうと，どうしてもよそよそしくなって，親しい心の交流やざっくばらんな（気楽な）つきあいがしにくくなる」と思うかという質問について，小学校では，「１．そう思う」と答えた児童の割合が，「２．そうは思わない」と答えた児童の割合をやや上回っていることがわかる。ところが，中学校，高校，大学と校種が進むにしたがって，「２．そうは思わない」との回答が次第に増加する。「２．そうは思わない」と答えた人の割合に注目してみると，小学校46％，中学校59％，高校60％，大学75％と，その割合が次第に高くなっていくことがわかる。つまり，校種が進むにつれて，敬語を使うと目上の人とのつきあいがよそよそしくなるとは感じなくなるものといえる。

さて，おなじ敬語に対する意見でも，３．６でみた上級生や部活動の先輩などには敬語を使うほうがよいかどうかということについては，校種による差異はほとんどみられず，一様に上級生や部活動の先輩などには敬語を使うほうがよいとする意見が多かった（前掲，グラフ10）。ところが，質問８では，グラフ11で示したように校種によって意見に差がみられることがわかったが，これは，この質問の回答が知識ではなく敬語使用の能力を反映していることを示していることによるのではないかと思われる。つまり，たとえ小学校の児童であっても，目上の人に対しては敬語を使わなければならないという知識を持っている。だが，そのことと敬語使用の能力があるかどうかということは別であると考えられる。

そして，能力という観点からみると，質問８にみられる意見の違いの推移は，３．２でみた先生や上級生に対することばづかいで困った経験があるかどうかをたずねた質問２の結果（前掲，グラフ２）と関連

づけて考えることができそうである。3．2でみたように，先生や上級生に対することばづかいで困った経験があるとする人は，小学校でもっとも少なく，中学校，高校，大学と校種が進むにつれて多くなる。すなわち，ことばづかいで困った経験があるということは，ことばづかいに気をつけなければならない場面に遭遇することが増えるということであるが，そうした場面に遭遇することが増えるということは，一方で，ことばづかいのなかでも重要な位置を占める敬語を身につける機会が増えるということであるといえる。敬語を身につける機会が増え，敬語が身近なものになるからこそ，敬語を使うと目上の人とのつきあいがよそよそしくなると感じなくなるのではないかと考えられる。とりわけ大学では，その傾向が顕著であることから，大学の学生はすでに敬語の使用に慣れており，一定水準のことばづかいを身につけているということができる。

4．アンケート調査のまとめ

ここまで本稿では，佐賀県内でおこなったアンケート調査に基づき，佐賀県の児童・生徒・学生の学校生活におけることばづかいに対する意識をみてきた。さいごに，ここまでの考察を校種ごとにみわたしてみたい。

まず，小学校では，ことばづかいに気をつける必要があるような人は先生に限られ，また，敬語を含むことばづかいの能力もそれほど高くないため，目上の人に対することばづかいで困った経験は少なく，敬語を使うと目上の人とのつきあいがよそよそしくなると感じることも少ない。だが，学校でのことばづかいが気になるとする人は他校種に比べて多く，また，授業内でもことばづかいは改まった方がよいと考えている人も他校種に比べて多い。こうしたことから，小学校の児童は，敬語を含むことばづかいの能力はそれほど高くないものの，正しいことばづかいであるように心がける傾向にあるといえる。おそらくこれは，小学校では，おもに先生から，発話の型を意識したことばづかいの指導や様々な機会をとらえたことばづかいの指導がなされることが関わっているものと思われる。小学校では，“先生から”ことばづかいを注意・教示された経験がある人が他校種に比べて多く，また，先生と接するような場面を学校生活でことばに気をつかう場面としてあげる人が比較的多い。

次に，中学校と高校では，小学校に比べて，上級生や先輩がことばづかいに与える影響が大きくなる。佐賀県では中学校から部活動が始まるが，生徒は部活動のような上級生や先輩と交流する場において，ことばづかいを徐々に身につけていくものと思われる。中学校と高校では，“上級生・先輩から”ことばづかいを注意・教示された経験がある人が他校種に比べて多く，また，部活動に関わるような場面を学校生活でことばに気をつける場面としてあげる人が比較的多い。このようにして，おもに部活動において上級生や先輩の位置づけが高まるなかで，目上の人に対することばづかいで困った経験がある人も多くなる。しかし，その一方で，小学校と比べると，先生からことばづかいを注意・教示された経験がある人は少なくなる。また，気の置けない同級生との交流に重きが置かれる中学校と高校は，人間関係の複雑な外の社会に比べれば，それほどことばづかいに気をつかわなくてよい社会であるといえ，学校でのことばづかいは気にならないほうだとする人も多くみられるようになる。

そして，大学では，大学生としてふさわしいことばづかいが求められるようになり，学校でのことばづかいが気になるとする人が比較的多く，また，先生や上級生に対することばづかいで困った経験がある人が多くいる。授業内での発言も，改まった方がよいと考えている人が多くいる。だが，敬語を使うと目上の人とのつきあいがよそよそしくなるとは思わない人が多くいることから，大学の学生は，すでに敬語の使用に慣れており，一定水準のことばづかいを身につけているのではないかと考えられる。

5．おわりに

以上のように，アンケート調査に基づく考察から，佐賀県の学校では，校種によって児童・生徒・学生のことばづかいに対する意識が異なることが明らかになった。それぞれの学校では，児童・生徒・学生のこうしたことばづかいに対する様々な意識が連動して，学校でのことばづかいのありよう，具体的には敬語行動に作用しているものと思われるが，そうしたことばづかいに対する意識が，小学校から中学校に進学する際に大きく変化することが判明したことの意義は，とりわけ大きいように思う。国研（2002）やそれに基づく尾崎（1997）では，小学校を対象としていなかったこともあり，この点についての指摘はなされていない。

これまで述べてきたように，佐賀県の小学校においては，先生からのことばづかいに対する指導が大きな意味を持つ。それが，中学校に進学すると，先生だけでなく上級生や先輩がことばづかいのうえで少なからず影響を与えるようになる。とりわけ，部活動を通じた上級生や先輩からの影響は大きいといえる。

たしかに，本調査で対象としたのは各校種１校であるので，この結果が佐賀県の実態のすべてを反映したものであるとは必ずしもいえない。だが，一方で，計506名の児童・生徒・学生を対象とした本調査の結果は，佐賀県内の児童・生徒・学生の学校生活におけることばづかいに対する意識のありようの一端を少なからず示すものであると考えられる。

ところで，こうしたことばづかいに対する意識のありようは，ことばづかいのなかでも重要な位置を占める敬語の指導をどのようにするかということを考えるうえでも，何らかの有用な示唆を与えるものであると思われる[10]。

文化審議会（2007）の『敬語の指針』では，学校における敬語の学習・指導を継続する必要があることを指摘したうえで，「国語科において敬語の基本についての知識を扱うと同時に，様々な人間関係や多様なコミュニケーションの場が体験できる総合的な学習の時間や種々の校内活動の機会等を活用して，敬語の実践的な使用についての学習・指導を行うなど，これまでに蓄積された工夫を一層充実させること」が課題としてあげられているが，そうした「敬語の実践的な使用についての学習・指導」も，ことばづかいに対する意識が校種によって異なることを認識したうえで，なされる必要があるといえよう。

具体的な指導のあり方については今後の課題であるが，たとえば，ことばづかいに対する意識において大きな変換を求められる中学校では，生徒のそうしたことばづかいに対する意識の変化にも配慮した指導が必要なのではないかと考えられる。とくに，本稿の分析をふまえると，少なくとも佐賀県では，中学校から始まる部活動は，敬語を含むことばづかいの指導のあり方を考えるうえで見逃せない機会といえる。

ただし，こうした学校でのことばづかいにおける部活動の関わりについては，追加のアンケート調査をおこなうなどして，さらに慎重に検討していく必要がある。本稿の分析からうかがえるように，部活動はことばづかいを考えるうえで見逃せない機会といえるが，部活動における人間関係は，現実の社会における人間関係に比べれば，決して複雑なものではない。また，グラフ３からわかるように，中学校と高校でも，先生からことばづかいの指導を受けたことがあるとする生徒も少なからずいる。さらには，生徒のなかには部活動をしていない生徒もいることから，部活動が生徒のことばづかいのありようにどの程度の影響を与えているのか，また，小学校から部活動が始まる他県での実態はどうかなど，様々な観点からのさらなる検討が望まれる。

こうした点のほか，国研（2002）の結果との比較からみた経年による違いや地域差の分析，また，ここ

[10] 敬語の指導のあり方については，これまでも多くの論考がある（氏原（1997），杉戸（1997），町田（1997），吉岡・朝日（2008）など）。

で明らかになった児童・生徒・学生のことばづかいに対する意識が学校での敬語行動に具体的にどのように作用しているかなど，明らかにすべき課題も少なくない。だが，少なくとも本稿では，学校でのことばづかいに対する意識は校種によって異なること，そして，学校でのことばづかいに対する意識を探ることは，ことばづかいや敬語の指導を考えるうえでも有用であることを，アンケート調査に基づき，具体的に示すことができたといえよう。

引用文献

氏原基余司（1997）「特集；敬語教育―敬語教育を考える　文化庁国語課の世論調査から」『日本語学』明治書院
尾崎喜光（1997）「特集；敬語教育―『学校の中の敬語』調査から」『日本語学』明治書院
国立国語研究所（2002）『国立国語研究所報告118 学校の中の敬語１－アンケート調査編－』三省堂
杉戸清樹（1997）「特集；敬語教育―敬語教育の課題　敬意行動の中の敬語を」『日本語学』明治書院
文化審議会（2007）『敬語の指針』http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/keigo_tousin.pdf（2014年12月１日現在）
町田守弘（1997）「特集；敬語教育―高等学校における敬語教育の現状と課題」『日本語学』明治書院
吉岡泰夫・朝日祥之（2008）「これからの国語教育」『講座社会言語科学第４巻教育・学習』ひつじ書房

謝辞

アンケート調査にあたっては，佐賀県内の小学校，中学校，高校の先生方と児童・生徒のみなさんの協力を得た。記して，ここに深謝申し上げる。